

研究区分	教員特別研究推進（教育推進）
------	----------------

研究テーマ	広域ヨーロッパ研究における総合的な支援に関する学際的な研究（1）				
研究組織	代 表 者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	栗田 和典
	研究協力者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	剣持 久木
		所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	前山 亮吉
		所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	森 直香
		所属・職名	経営情報学部・教授	氏名	上野 雄史
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	石川 義道
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	小窪 千早
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	小谷 民菜
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	佐藤 真千子
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	マティアス・ファイファー
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	堀内 賢志
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	宮崎 晋生
		所属・職名	国際関係学部・准教授	氏名	米山 優子
		所属・職名	短期大学部・准教授	氏名	有元 志保
		所属・職名	国際関係学部・講師	氏名	西村 晶絵
	発 表 者	所属・職名	国際関係学部・教授	氏名	栗田 和典

講演題目
広域ヨーロッパ研究における総合的な支援に関する学際的な研究（1）
研究の目的、成果及び今後の展望
【目的】 本研究の目的は、国際関係学研究科に設置された広域ヨーロッパ研究センター（Wider Europe Research Center）の研究活動の成果を、国際関係学研究科および国際関係学部の教育に資するものへと展開することである。この目的は 2024 年度までの「European Studies の研究ツール開発に関する研究」からひきついだものである。 「広域ヨーロッパ」は、アフリカおよび南北アメリカとともに環大西洋世界を構成し、16 世紀の第一次グローバル化（いわゆる「大航海時代」）からインド洋から東アジアまでの海域・地域と構造的な一体性を有してきた。また現在に至るまで、諸地域や諸国家が礫岩（conglomerate）にもなぞらえられるような集塊化と流動化を展開し、多様でありながら一体をなす地域世界（regional world）である。したがって、「広域ヨーロッパ」という対象にアプローチするには共時的な構造と時系列的な動態の両方を把握することがもとめられ、国際関係論をはじめ、政治学、経済学、文化研究、言語学、文学研究、歴史学など、さまざまな研究分野の成果を活用しなければならないことがあきらかである。研究の初期にある学生にたいしてはこうした学際性の意義と手がかりを示すことが重要である。 【成果】 2025 年度は研究の総合的な支援のあり方を検討し、必要な情報の収集をおこなった。とくに重視したのは学生が研究の第一線にある研究者に接することのできる特別講義であり、また、研究センターの構成員が相互に他分野の動向を知って吸収する機会となる研究会の活動である。この二つにくわえて、過去の取り組みとおなじく年度計画では、ウェブサイトに登載する教育資料の充実、国内外の教育機関との情報交換、合同ゼミ学生発表会などを企画した。 オンライン会議システムの積極的な利用により、特別講義は当初の予定の 8 回を上まわる計 11 回を開催した。とくにシリーズの特別講義を開催したドイツ・ブレーメン経済工科大学をはじめ、ロシアのモスクワ国立国際関係大学、トルコのボアジチ大学などの交流協定校や静岡県立美術館などの国内の研究機関との協力によって実現した企画が目立った。研究会については 2025 年の国際情勢をめぐって客員研究員を本学に報告者として招き、当初の計画どおりの 2 回を開催できた。また、国際関係学部内の五つのゼミの参加を得て 12 月 2 日に開催された合同ゼミ学生発表会では、発表者 10 名、参加者 25 名によって、学生が研究発表の準備と討論を実践的に経験した。 【展望】 本研究の直接の成果となる論文の題材やテーマの収集と執筆の支援や指導のあり方の検討は、卒業研究や修士論文にとりくむ学生の傾向および学会動向の把握にとどまる。合同ゼミ学生発表会で提示された学生のテーマと WERC 研究会の研究活動の問題関心には、残念ながら乖離がある。前者を後者に接続させるには、これまでのセンターの共同研究とおなじく、①基本的な事実や先行研究における共通の了解事項を説明し、②事実や概念にかんする複数の議論の要点を提示したうえで、③複数の視点からの考察をうながさなければならない。研究員個々が授業（とくに演習＝ゼミ）において実践を継続することがもとめられる。